

7月の植物

ハマボウフウ (セリ科)

学名 : *Glehnia littoralis* F.Schmidt ex Miq.

故貞松光先生の「佐賀の野草」(1990年発刊)によると、「虹の松原などを歩くと10年くらい前まではかなり見かけたが最近になって激減した」とある。激減の理由は食用と思われる。別名「八百屋防風」。しかし、今では佐賀北部の海岸の砂地を歩けばごく普通に見られる。食用にするといい話もあり聞かない。一方福島県では、かつて本種が絶滅危惧Ⅱ類に指定されていたが、原発事故の影響で採集圧が減り、数が回復したという話がニュースになっていた。絶滅から免れるのはいい事のようにだが、植物を身近に利用する文化の衰退のように思われて寂しさを感じる。

本種の花期は6～8月だが、今回観察した6月末には花の個体はなかった。すでに花を終え実を結んだ姿について今回は触れたい。セリ科の植物は、複数の花が散形花序に集まって咲く。ひとつの花に雌しべがふたつ、それぞれの雌しべ毎に子房は二室に分かれ、それぞれに一つずつ種子ができる。双懸果と呼ぶそうだ。

下記画像中のボールのようにまとまったものがひとつの花序であり、複数の果実がまとまった状態である。果実は乾燥するに従って木化し、花序の集まりから外れてバラバラになる。最後は果実も二つに割れる。砂浜を風に吹かれて転がったり、波にさらわれるのにちょうどよい大きさだ。ちなみに食用にできるのは早春の新芽である。

(文責：寺村朋輝)



ハマボウフウ
(唐津市西の浜、2021年6月)

- ① 花序から外れたばかりの果実
- ② 半分に割れた果実
- ③ 乾燥して小さくなった半分の果実
- ④ 果実の中に入っている種子

